

---

# 幼馴染の彼をオトす為に普通少女が頑張る話

蝶乃 みなと

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幼馴染の彼をオトす為に普通少女が頑張る話

### 【Nコード】

N0047BA

### 【作者名】

蝶乃 みなと

### 【あらすじ】

幼馴染の美紀と真志、美紀は至って普通の女の子だけど真志はかなりの顔の良さ。（皆はこれをイケメンという）美紀が真志と付き合うことを夢みて色々頑張るお話です。でも高校生活には色んなハードルや試練があるので応援してあげてください（´・`・´）

幼馴染の彼と高校で同じクラスになれるのかドキドキの件（前書き）

新感覚な感じで書いてみました（、・、・、）  
良かったら読んでみてください  
三

## 幼馴染の彼と高校で同じクラスになれるのかドキドキの件

「美紀<sup>ミキ</sup>ってさ、なんで太っちゃった訳？」

中学校最後（卒業式）の下校の時に  
幼馴染の持田<sup>モチダ</sup>真志<sup>シンジ</sup>が爆弾発言。

え、てゆうかレディーに向かつてそんなこと言う人いるの？  
この世に存在することすら知らなかったわ！  
てゆうか太ってないし！結構これでも痩せてるほうだし！  
てゆうかデリカシーない男だな！

まあその後私はダイエットで3キロちよい痩せた。

私、<sup>ハラダ</sup>原田美紀<sup>ミキ</sup>は真志とは幼稚園の頃からの幼馴染で  
小さい頃から顔が良かった真志（はつきり言えばイケメン君）  
に群がる女を駆除するのが

昔から私の仕事だった。

私たちは高校一年生になった。

真志と私は当たり前みたいに同じ高校に入った。

そこらへんが幼馴染の特権。  
いつになっても離れないこと。

高校生と言えば恋の発掘現場、恋を発掘しまくれる場所とい  
う訳で。

もちろん顔が良い真志は女子生徒の注目の的という訳

真志は空気も読めなければデリカシーもないという男だけど

イルに

そのさっぱりした性格が女の子にはツボらしく、真志のスマ  
イルに  
何人もの女がオチていくのを見てきた。

私が真志に群がる女を駆除してきた理由は他でもない。

私が！真志に！惚れているからである。

あわよくば真志と付き合いたい。

私の容姿だと幼馴染という設定がなければ近づくことも触れ  
ることさえ

一生叶わない夢だったと思う。

そこには神様と産んでくれたお母様に感謝するが、どうせ神  
様なら

私と真志をくつつけて下さい、死んだら私が次の神様になっ  
てあげるから！

そろそろ高校生になった私たちの話をします。

高校で一番大事なものは『クラス発表』！

んでね、高校のクラスは4クラスまであったわけ。

私が真志と同じクラスになれる確率は低くもないし高くもな  
いという

微妙な確率。

ドキドキしながら見ていると、真志が叫ぶ。

「あ、俺1 - 4だわ」

1 - 4!?

私は急いで1 - 4のクラス名簿を見た。

私の名前は原田だから真志より前のはず。

目を凝らして見てみると、原田、原田・・・あった！

私の目の中には紛れもない『原田』の文字が！  
ヤッタ〜もう神様ありがとございませう、一生このご恩は忘  
れませぬ。

「真志、私も同じクラ」

「おつ美紀のクラス見つけ、1-1じゃん」

・・・はい？

あのあのあのあのすみません

さつき私のクラスが1-1だと言いましたか？

私は1-1のクラス名簿を見る。

ん！？私の原田美紀という名前が。

じゃあ1-4にいた原田は・・・んん！？

原田・・・さとみ？

同じ苗字の原田さん。

見ず知らずのあなたを呪います。

くっそ、こういう間にも真志を狙ってる女子がいるっていう  
のに。

周りを見渡せば真志を見てキヤツキヤツ騒ぐ女子たちの群れ。

真志はいままでに付き合った女子はいない。

（私の駆除のおかげなのか真志が付き合う気がないだけなのか  
わかんないけど）

ああもうなんで同じクラスじゃないの！

神様とかもう信じない絶対信じないあああああもう嫌

「クラス離れちゃったなーでもまあ昼休みに会いに行くから」

「う……うん」

真志iiiiiiiiii(泣)

高校生活……クラス離れちゃったし今まで以上に警戒しなければ。

女子高生は怖い、きっと怖い、肉食系、絶対野獣、絶対ハイエナ。

## 入学初日で友達ができるかできないかの件

GO

仕方なく真志と別れた私は未知の領域となる高校生の教室へ

真志も居ないし鬱鬱鬱鬱

おっとダメだぞ

昼休みには真志が来てくれる！

それまでに何とかしないと。

とりあえず教室で同族を見つければ最高なんだけど。

これから一年一人で過ごさなきゃいけないとなるとか嫌だし！

私は少ししかない勇気を振り絞って教室のドアを開けた。

イタ                   ！！！！

清纯派女子、ビバ純粹女子！

窓際で本を読む超美人なあの子はきっとハイエナなんかじゃないし

男漁りとか合コンとか不純異性なんちゃらとかいうのとは無関係な領域に

凜とたたずむ純粹でマトモ、真面目女子！

私は自分の席を確認する。

えっと・・・あつたあつた、窓際！

あの清纯派女子の後ろだ！

今さらだけど最高にツいてる（＾＾）！



これならなんとなく仲良くなれるハズ。

私は清純派女子の後ろの席に座ると後ろから肩を叩く。  
どんな声でどんな優しい心の持ち主なんだろう！

「何か？」

「えっと、後ろの席の原田美紀。よろしくね」

「私は小島紗羽、こちらこそよろしくね」

キタキタキタキタキタ

!!!

この反応は優しくて清潔で純粋な子の反応である。

「よかつたら話さない？」

「いいよ」

「どこ中出身なの？」

「私、ハラ中なの」

「ハラ中って小原中！？結構遠いところから来たんだね」

「うん、原田さんは？」

「あ、原田さんじゃなくて美紀でいいよ」

「あ、ほんと？じゃあ美紀って呼ばせてもらおうかな。」

私の事も紗羽でいいよ」

「じゃあ紗羽って呼ばせてもらうね。」

私はすぐその新中だよ」

「そうなんだー、あ、もしよかつたらアド交換しない？」

「あ、するする！」

これすごい良い展開じゃない！？

さっそく新しい友達出来たしこれで一年間は絶対安心。

あとの心配は真志だけ。

真志と付き合えれば青春真つ盛り！て感じて良かったのに。

「美紀は彼氏とかいるの？」

ヴツ・・・まあこの話題は逃れられないか

「私は・・・まあ好きな人はいるけど」

「へえ！誰？同じ高校？」

「ん・・・んまあね」

「へー頑張ってるね」

あ、あんま追求してこない？

それはそれで有難い。

無駄に追求してくる人っているよねー

私はそういうの無理派だし。

入学初日に出来た友達の良い人だった。

いまのところそれだけが救い。

幼馴染の彼を猛獣の群れから奪えるか奪えないかの件

私に友達ができたのはいいけど  
他の人は仲よくもなれそうもない人達ばかり。

おもつきりケバイ化粧、茶髪金髪あたりまえ  
一年生なのに制服は着崩してるしスカート丈短っ  
耳やら口やら鼻やらに未知の穴……

ゼツタイ仲良くなれない  
てゆうか話すことさえ無理無理無理無理無理

んで、昼休み。

「美紀！」

この声は真志！  
教室のドア付近でニコニコ笑いながら手を振る真志発見  
やっと愛しの真志が来てくれたああああ

だけど一瞬にして真志は女子の群れによって消えていった。

・  
・

くっそう邪魔な女どもめ！  
真志は私だけのモノ！

真志のところへ向かおうとすると紗羽の声。

「あれ、誰？」

「あ、ああ、あれは1・4の持田真志。」

小さい頃から顔が良くてモテてたの」

「へーかつこいいね、ちょっと話してこようかな」

えっ!?! ちょ紗羽!?!

やばいやばい紗羽とライバル? になっちゃうとか無理!

「でも真志って女の子と話したりしないから・・・」

「?呼び捨て?」

「あ、ああ・・・真志と私は幼馴染なの」

「へーすごいね、イケメンくと幼馴染なんだ」

「そういつても小さい頃から一緒だから、すごいとかよく分か  
かないんだ」

「そうなんだ」

「ちょっと呼ばれてるから行くね」

真志の顔が良い為に!

私の友達の紗羽まで真志の虜とらになっちゃうかもしれないな  
んて!

なんて運が悪いの私よ・・・

「真志!?!」

「あ、美紀」

群がる女をかき分けて真志と無事会っ。

「ちょっとアンタ誰よ? 真志君のこと呼び捨てなんて何様!

「？」

近くにいた超美女が叫ぶ。  
私のことですか!?

「美紀、いこうぜ」

真志が私の手を握って廊下へ脱出。  
てゆうか、手、握っちゃった、よ。

超美女は私たち二人を見て悔しそうに叫んでいた。  
ざまあみそらしど!

結局勝つのは一番真志に近い人間、つまり幼馴染の私!

「大丈夫?」

「あ、うん。真志こそ」

「俺は大丈夫だけど」

「てゆうか・・・その、ありがとね。助けてもらっちゃって」

「いや会いに行くって言ったの俺だし。」

「どう?クラスは」

「友達出来たよ、ばっちり」

「マジで!まあ美紀は良い奴だもんな」

この時間がもつと長く続けばいいのに。

なんでクラス離れちゃったんだろ、神様。

どうして私と真志の仲を引き裂こうとするの?

「ね、えねえ真志、帰りひま?」

「おう」

「一緒に帰れない?」

「何言ってるんだよ、俺らずっと一緒に帰ってたじゃん」

心臓がうるさい、

真志は私の事をただの幼馴染として見てる。

だけど私は……

期待しちゃうよ、そんな言葉言われたら。

「ねえ、私たちってさ……」

「ん？」

「……いや、なんでもない」

言ったら壊れる、絶対に。

私と真志だけをつなぐ幼馴染の絆という名の糸が。



ら

「それはそれで良かったわ。もしもお前が彼女ですとか言った  
まじ半殺しにしてたから(笑)」

(笑)！？

(笑)つてなに！？

「でき、真志君にもう近づかないでくれる？」

・・・！？

「私たちとか中学の頃から真志君に憧れてたの。」

真志君はみんなのモノ、それが守れない奴は排除しなきゃい  
けなくなるからあ」

排除・つまりハブってことね。

初日から運ないなあ、こんな奴らと同じクラスになるなんて。

「オイ、何とか言えよ」

絶対嫌。殴られてもハブされても真志だけには、  
真志だけは私とずっと仲の良い幼馴染でいてほしい。

「守れない」

「あ？」

「そんな約束出来ない守れない無理絶対不可能！  
そもそも真志はみんなのモノって言うけどいつから真志はみ  
んなのモノに

なったのよ！？真志は真志だしそんな勝手なルールなんか守



れない！

いつから真志はモノになったのよ!？」

言っでやった。言っでやった。

同時に後悔。後悔後悔後悔後悔後悔……鬱鬱鬱鬱鬱鬱……  
ぜったいハブ、ぜったいイジメ、ぜったい転校させられる  
るるる

「何やってんの？」

「しっ真志君」

真志？

厚化粧女たちが叫ぶ。

私が後ろを振り返ると真志。

「俺が誰のものだって？」

「真志君、これは違」

「何が違うんだよ？俺はお前らのもんになったつもりはねえ  
なるつもりもねえ、分かったら美紀には二度と近づくんじゃ  
ねえぞ」

「じっごめ、……なさい!」

厚化粧女は真志の横を走ってすり抜けて出て行った。

真志の顔、怖い、な あ

本気で怒ってくれてるの？

ねえ真志、どうして私にそんな優しくしてくれるの？  
守ってくれるの？真志は、私の事どう思ってるの？

「また何かやられたら言えよ、すぐ助けるから」  
「うん」

「俺これ届けに来ただけなんだけど」

「あ、私のピン」

「これないと前髪とめられねえんだろ」

「ごめんごめん」

「美紀ってほんと世話焼けるよな、気をつけるよ」

真志はピンを私に渡すと手を振って出て行った。  
ピン、忘れてたか。

幼馴染の彼が噂をどう思ってるのか聞きたいけど聞けない件(前書き)

この話はすごく短くなってしまいました汗

次回からは春をすっ飛んで夏編になります笑

ストーリーがグングン進んでいきそろそろ終わりますw

良かったら最後までよろしくお願いします

幼馴染の彼が噂をどう思ってるのか聞きたいけど聞けない件

あのあとは特に何事もないまま終わった。

でもあの大騒ぎ（どっちかつつーと小騒ぎだけ）は  
クラスの目の前でやったのでクラスメイトはもちろん  
ほかのクラスメイトも見ていたので噂話がうるちよろして  
いた。

特に、真志ファンに。

帰りのHRホームルームが終わると真志が迎えに来ていた。

「待っててくれたの？」

「もちろん」

二人で学校内を歩くと色々な噂が流れているようで全部耳  
に入ってきた。

私と真志が付き合っているとか（それはそれで私にはありが  
たい）が主だけど。

真志、どう思ってるんだろ、この噂。

そんなこと、死んでも聞けないけどね笑

幼馴染の彼が噂をどう思ってるのか聞きたいけど聞けない件（後書き）

前書きでも書きましたが、次回からは春をすっ飛んで

夏編へと突入します\*

しかも夏休みがすぐ来るので驚かないでね）

幼馴染の彼をお祭りに誘えるかの件（前書き）

前回で言ったとおり夏休み直前のお話です。

夏の学校風景はほとんどかかれなまま夏休みに持ってかれます笑

## 幼馴染の彼をお祭りに誘えるかの件

あつい、あつい、あついで日本！

夏って本当憂鬱だよねw

プールに飛び込みたいわあ

突然ですが夏と言えば、そう！

お祭り・花火大会と言った大イベント（・・・）

乙女にとっての恋の戦争時代

つまり私にとっても戦争時代だということなのですぬ

今度こそ（？）真志と二人きりでいいムードになりたい（

願望）

さっさと夏休みに入ってほしいのに。

夏だからなの？

夏だからこんなに時が過ぎるのが遅いのおおおお？

かつん。

イタ…い？

目をぱっちり開けると目の前で辞書をもった国語の先生が怒ってらっしゃるわ。

あ、チョーク投げつけられたわけね

てゆうか前々から疑問だったんだけどチヨーク投げるのはいいの？

ルール違反じゃないの？頭にぶつかんなかったら絶対危険だもん

コントロールがない先生がチヨーク投げたら絶対顔面に当たるよね？

「原田、どうしたボーっとして？」

「う…え？」

ズシッ

「いつ…たあああああ」

「目が覚めただろ？」

国語の先生は笑っていった。

これは、体罰だ。

辞書を人の頭にぶつけるといふ名の体罰だ。

「教科書は人の頭を叩くためにあるものじゃなくて

人の頭を良くするためにあるんですけど…！」

「おっ上手い事言うね笑」

こ…んのクソ野郎…！

心を入れ替えて授業を受けようにもなかなか頭に入らない。たぶん耳には入ってる。うん、耳には入ってるんだけどね、なかなか脳内には入らないんだなーこれが

私はシャープペンで机に夏休みまでの日にちを書いた。



あと2日…この微妙な感じが嫌だわあ  
早く夏休みになんねえかなー

「美紀ったら怒られてたねー笑  
辞書痛くなかった？」

紗羽がニコニコしながら言う。

「めっちゃ痛いよ泣」  
「そろそろ夏休みだねー」

めっちゃ話ズレた！

「確かにね  
夏休みっていったらイベント盛りだくさんだよね」  
「お祭りとか？」  
「うんうん好きな人誘って二人きりで…キヤ ……なん  
てね笑」

「すきな…人ねえ…」  
「うんうん」  
「美紀は好きな人いるんでしょ？誘うの？」  
「う…誘うだけ誘ってみるかなー  
もしかしたらほかの人と約束してるかもだし」  
「そっか…じゃあ私もそうしようかな」  
「え？どうゆうこと？」  
「私も気になる人いるんだあ笑」  
「まーじーでー！」  
「教えないけどね笑」

「お互い頑張ろうね」

真志とお祭り…考えただけでも素敵！  
絶対素敵な夜になるし！

今日の帰りでも聞いてみようかな…。

「きりーっ れい さよーならー」

このあいさつ誰もやってねえんだからやる必要ねえだろw  
てゆうか私日直だあ

日誌書いてさっさと終わらせちゃおうっ

「ふう」

終わった終わった終わったー

さて真志と帰ろうっ

教室のドア付近にたまってる男子軍団を切り抜けて人ごみの廊下に出ると

ありゃ？真志が居ないや

真志のクラスのほうが遅いのかな？

真志のクラスに行ってみると誰も居ないし  
あれれ？どこ行ったんだろっ？

真志を探して下駄箱まで来てしまった汗  
帰っちゃおうよー

って何か近くで聞こえる？この声…紗羽？

あ、そういえばここの下駄箱つて下駄箱の隣の小窓から、  
裏がすぐ裏庭だから裏庭の声の下駄箱から声ダダ漏れなん  
だよー

裏庭で告白とかしてもみんなにまるぎこえだから可哀想な  
んだよねw

『ねえ一緒にお祭り行ってくれない？』

…！？紗羽がお祭り行かない？つて…てことは一緒にいる  
人が紗羽の好きな人？

裏庭につながっている窓があるとは言え、めっちゃ小さい  
から顔を覗くことは出来ない

『ごめん、俺、君のことよく知らないし、それに

もしかしたら一緒に行く人がいるかもしれないから』

『それって、どういうこと？』

『まだ約束はしてないってことだよ

そーゆうことだから、じゃあね』

やばっ、来ちゃう汗

急いで下駄箱から逃げて階段を上つてからまた下がった。  
上から来たふりして、何も知りませんよ〜アピールしながら

らも

紗羽の好きな人バツチリ目撃してやる！

てゆうか紗羽も紗羽で教えてくれればいいのにー

そしたら応援するのにさ！

てゆうかさっきの男の声なんか聞いたことあるんだよねー  
上手く聞き取れなかったからよく分かんなかったけど

んで、冷静を保って階段を下りるとバツタリ紗羽と対面。

「あれ？紗羽じゃん〜どうしたの？もう帰るん？」

「あ、うんーそうなの」

「そっか、じゃあねー」

「バイバイ」

あれ？紗羽ひとり？

おかしいなーどうしてだろ…

「紗羽？」

ん、この声…って

「真志？」

「紗羽かーゴメンゴメンちょっと用があって」

「あ、ここにいたの？」

「おうー、ちょっと鞆とってくるわ」

真志が階段を上っていくのを見て確信した。

紗羽、真志に、惚れたな？

紗羽が呼び出したのは真志。

気になる人っていうのが真志ならお祭りに誘うのも分かる  
紗羽は私が真志の事を好きって知らないんだから好きにな

っちゃうのも

しょうがない事だ、未然に防げなかった私が悪いのだ。

てゆうか、えー…

まさかの唯一の友達がライバルになんの？

もう神様ってほんとイジワルだよね笑

もういつそ清々しく笑うしかないのだ。

階段を下りる足音が聞こえて、真志が現れた。

「じゃ、かえろっか」

「うん」

そういえば、お祭り…

さっき真志、一緒に行く人がいるかもしれないって言ってた

けど

誰の事だろう？友達？まさか好きな人？

「ねえ美紀」

「ん？」

「祭り、誰と行くん？」

「あ…あう、あ」

なんかいざとなったら言いにくい！

これで断られたらなんか恥ずかしいし汗汗汗

「もしも約束してないんだったら俺と行くっよ」

「え」

「うん？」

「いいの？」

「なにが」

「えっと、その、一緒に…お祭り行っても」

「だから誘ってんだけど笑」

「そ、か」

なんかすごく恥ずかしい、顔、赤くないかな…

「じゃあ、行きたい」

「じゃ決まりな、てゆうか浴衣着てこいよー浴衣」

「浴衣あ？無理無理！着方すらわかんないし」

「てゆうか浴衣って私に似合う服（？）じゃないから笑」

「そうかなー俺ぜってえ似合うと思うんだけどー」

真志が笑う

そんなこと言われたら…

そんなこと言われたら浴衣着るしかないじゃないか！

「んじゃ、じゃあな」

「ばいばいっ」

家に帰って速攻お母さんに叫んだ。

「浴衣出して！」



幼馴染の彼をお祭りに誘えるかの件（後書き）

次回は早速夏休みに入ってしまうと思います）、・・・（



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0047ba/>

---

幼馴染の彼をオトす為に普通少女が頑張る話

2012年1月9日06時47分発行